



旅に馴染むもの

早見和真

沢木耕太郎さんの『深夜特急』に当てられた、ど真ん中の世代だと思う。七年通った大学時代、僕も例に漏れず授業そっちのけでアルバイトをしては、わずかなお金を握りしめて世界中を旅して回った。

出発前夜、クタクタのグレゴリーのバックパックに収められるのは、言うなればレギュラーとも呼べる旅の必須アイテムばかりだ。下着に歯ブラシ、数枚のTシャツに、季節や土地によっては防寒具、サンダル、あとはせいぜいハンドタオルが一、二枚と、紙巻きタバコ1カートンといったところだろうか。

たったこれだけで、30リットル程度のバックパックはパンパンに膨れあがる。まだスマホのなかった時代だ。音楽プレーヤーの類いは泣く泣く諦めていたし、カメラもほとんど持っていかなかった。そんな色気のない、必需品だけが収められたバックパックの中で、ほぼ唯一の奢侈品が本だった。

最低でも三冊、容量に少しでも余裕があればそれ以上。どの本を旅に連れていくかと考えている時間は楽しかったが、それ以上にかさばることと重量はいつも悩みのタネだったし、そのくせ旅の前半に大抵読み終わってしまうことには腹を立てていた。

基本的に旅にデジタルデバイスは馴染まないという考えの持ち主ではあるけれど、この点だけは現代の旅行者をうらやましく感じる。板チョコほどの薄さの機械に、数百、数千の物語を詰め込んでいけるのだから。それは小説に限らず、マンガでも。現代の旅には『ゴルゴ13』を全巻持つて行くことだってできるのだ。もちろん素晴らしいことではあるけれど、それでも……だ。

僕の旅には、物語としてだけではない、実物としての本の思い出がたくさんある。四十時間以上揺られていたインドの寝台列車で、腕を痙攣させながら読み耽った『銀河鉄道の夜』。読む本がいよいよ尽きたマダガスカルで、外国人旅行

者から恵んでもらうように譲り受けた『The Beach』。あまりにもめり込みすぎて、チリのホテルに何日も籠もりきって完読した『百年の孤独』。なぜかミヤンマーの食堂で手に入れた『地球の歩き方ハワイ編』……。

紙そのものの手触りに、そこに染み付いた土地の匂い、そのときの風景や状況も一緒に胸に刻み込まれている。

やっぱり旅には紙の本がよく馴染む。先に「唯一の奢侈品」と記したが、少なくとも僕のそれにとっては必需品だ。

この数年のコロナ禍で、世界はグッと遠くなった。でも、自分にそう言い訳しているうちに、きつと年を重ねていって、体力を失っていくのだろう。

さあ、書を持って旅に出よう。どんな景色と物語が未来の僕を待っているのか。そう想像するところから、もう旅は始まっている。

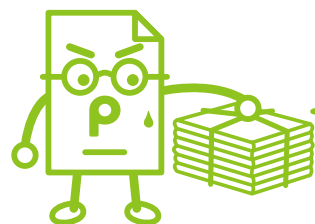


はやみ・かずまさ●作家。1977年、神奈川県生まれ。2008年『ひゃくはち』でデビュー。2015年『インセント・デイズ』で日本推理作家協会賞(長編及び連作短編集部門)を受賞。2020年『ザ・ロイヤルファミリー』でJRA賞馬事文化賞・山本周五郎賞を受賞。近著に『笑うマトリョーシカ』『八月の母』『新! 店長がバカすぎて』などがある。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙に一番多く使われている原料は?

答えは「木」と思っている方、多いはず。でも実は、使用済みの新聞や雑誌、段ボールなどの「古紙」なんです。その割合は、なんと原料全体の60%以上。古紙利用率は年々高まってきているんです。



古紙利用率の推移



資料：経済産業省「生産動態統計」

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」](http://kamitsubu.com/) WEBサイトをご覧ください。

今回は12月1日号です。